

短期派遣 EUROPA 派遣報告書

派遣先：ロシア国立芸術学研究所

派遣期間：2012年9月1日～2013年2月14日

氏名：鈴木佑也

このプログラムを利用して得た成果は次の三点に集約される。

一つ目は、現地でのみしか得られない資料の収集を行えたことであろう。ロシア関連の資料や研究は、おそらく近隣アジア諸国に比べ我が国ではロシアと縁の深いドイツやフランスと並んでかなり発展していると言える。しかしながら一般認識上、人文学では文学や演劇研究に特化しており、それ以外の対象となると日本で資料を手に入れるのは難しくなる。この点が研究対象であるロシア並びにソヴィエト建築の研究ないしは一般認知を困難にさせている。そのため、該当する研究分野で本国との交流を活性化させなければならないのだが、残念ながら建築分野に関してはロシア側から日本側への招待はあっても、逆のパターンはあまりない。この点は我が国の建築分野とロシアにおける建築分野の認知度の差が反映されていると言えるが、それを補完する研究者間の交流がほとんどないことと研究分野と実践分野での交流が少ないということも関連している。こうしたことから、資料を収集という目的ではあったが、資料収集と共に現地ではどのように研究対象（ロシア・ソヴィエト建築史）が受容され一般的に紹介されているのかという点にも留意した。

資料収集に当たって、既に月次報告書でも記してきたが、ロシア国立文学芸術アーカイブとロシア国立アーカイヴで作業を行い、前者では当時のソヴィエト建築界に関連した資料を収集した。後者では、建築界に当時の政局がいかんして影響を及ぼしていたかということを読み、政府機関で決定された建築関連の法案や条項、またそれらに関連した政府機関内でのやり取りを記した文章を収集した。前者に関しては、月次報告書で度々言及したので割愛するが、政治機関での建築に関する文書を収集することで、芸術分野としての側面が強くうち出される傾向にある建築分野を、社会的な事情（経済や政治）とより関連しているということを改めて認識するに至った。もちろん全体主義体制下であれば、建築の見ならず他の芸術分野においてもイデオロギーや何かしらの政治決定が志向や芸術活動に影響を及ぼすが、それ以外にも実務的な面、例えば建材費用や建造物を建設するための施工費用、建築労働者の雇用といった予算は他の芸術分野と比較して、建築作品そのものにより直接的に影響を及ぼしている。政府予算の関係から、ある建築物で用いられる建材が安価なものに変更されることになれば、設計者が計画したものと実際に施工されたものでは相違が生じ、また都市計画や地区計画との関連で建造物の敷地面積を縮小ないしは拡大するとなると、やはり設計案との相違が生じることになる。こうした点が単純に経済的な問題によって生じているのか、ないしは政治的な判断によって生じたものであるかを

見極めるには、政府機関内での文書を解読しなければならない。こうした作業と判断材料が今回の資料収集で得られた。

もう一点は、積極的に現地での学術会議に参加する動機が得られたことである。この点は最初に挙げた点と関連しているかもしれないが、資料収集の後、そこで得られた情報やそれによって構築された見解を直接問う場所として、私は学術会議への参加を利用した。もちろん、ある程度自らの研究がまとまった時点で自らの見解をかたちとして報告することが望ましいのであろうが、一方で単に自らの見解を披瀝するのではなく、同じ分野の研究者仲間との交流ないしは自らの見解をそういった研究者に述べることによって再確認もしくは訂正するといった場所として考えていた。加えて、そういった交流や他の研究者の報告等を耳にすることで、研究分野における現地の言葉での専門用語の使われ方などを学ぶことができた。また、取り組んでいる研究対象が本国においてどのように受容され、どういった観点から論じられているかということも確認できたのは大きな収穫であった。

加えて、学術会議等へ積極的に参加したことで、そこで交流を深めた研究者たちを通じて別の学術会議の情報やセミナーなどの情報も得られることができた。こうした点はインターネットが発達している今日においては容易に得られるものかもしれないが、早い段階つまり企画段階での情報やその時点での組織者側のコンセプトを知ることはできない。そのため、もちろんそうした会議やセミナーへの参加につながる有益なものであったが、自らが何かしらのセミナーや学術会議等の企画に関わる際の参考として、こうした交流は非常に有益なものであった。

この期間で得られた成果の最後の点は、研究対象を外国人である自らがどのように今後アプローチし、また自らが負う文化・歴史的背景と関連させてどう論じるかという緒を得られたことである。今回の助成では1930年代のソヴィエト建築界に外国人建築家がどのように影響を与えたかということ、全体主義体制下でいわゆるソヴィエト国外の現代建築がどのように受容されていたかという点から調査した。このことは単に研究対象として興味を持つのみならず、自らが置かれている状況、つまり外国文化を研究するに当たり本国の研究者と比較して至らない部分や外からの視点でしか気づかない点を発見するというプロセスと重なっている。確かに外国文化を研究する上では対象とする分野やその国の文化全般に精通することは必須であるが、そうした基本に絡め取られすぎでは新たなパースペクティブを見出すことはできないのではなかろうか。研究者としては、研究対象に自らの状況を投影させることはあまりよくないことかもしれないが、むしろ研究対象の周辺事情やそれに関連する資料収集を行う過程で、研究対象によってこうした点を気づかせてもらったと言える。

具体的にこの点は当時のわが国の建築事情とソヴィエトの建築事情の比較、または1930年代のソヴィエト建築界側から当時の日本建築へのアプローチが存在したが何故途

中で頓挫したかという、目下取り組んでいるテーマの一つに取り入れられている。一方で現地で日本建築ないしは文化を研究する研究者との交流によって、互いの研究対象に対してどの点に焦点が当てられ研究されているのかという点も、上記してきた認識をより強めることとなった。もちろん、互いが互いの研究対象に精通しているわけではないが、一般認識としてどのように捉えられているかを確認できた。加えて、こうしたことにより引き起こされる関心や認識のズレを探ることで、我々外国人研究者と現地の研究者が負う研究背景までは探ることができなかったが、そのきっかけをつかみ、今後の研究に反映できればと考えている。

簡潔ではあるが、今回のプログラムによって得られた成果は以上である。短期間であったため、きっちりとしたかたちでの成果を残すというよりも、その端緒をつかんだり途中経過というかたちになってしまった。だが、学術会議において研究成果を発表できた点は満足しており、またこの助成によって行ってきた資料収集が今後の研究で活かせるよう、これからも研究に励んでいきたい。